JYBA

Volume 57

2025.6.30

ALL JAPAN YOUNG BUDDHIST ASSOCIATION

イラストレーターでもある当会理事長　新井順證による　全国大会のテーマ　日本三鳥居をイメージしたメインビジュアル

全日本仏教青年会

ダイワの
宗教法人向けサービス

大和証券は、宗教法人の皆さまのさまざまな課題に対して、幅広いサービスを提供しています。「人口減少」「核家族化」といった構造的な問題に加え、「新型コロナウィルス」による行動変容もあり宗教法人を取り巻く環境は大きく変化しております。永続的な法人運営を実現するために、**積立金や退職金準備など目的に応じた資産運用のご提案**に加え、**不動産サービスやクラウドファンディングをご紹介**させていただきます。

資産管理・資産運用	不動産サービス
クラウドファンディング	仏教に関する実態把握調査

●本サービスは、宗教法人のお客さま向けのサービスとなっており、その他のお客さまでは、サービスをご利用いただけない場合がございます。また、宗教法人のお客さまであっても、ご依頼の内容・サービスの種類等によってはサービスをご利用いただけない場合がございます。●各サービス内容は2024年4月現在のものであり、今後予告なく変更される場合があります。●お客さまのご相談内容および各種業法を踏まえ、必要に応じて外部専門家・提携企業等を紹介し、サービスを提供いたします。また、お客さまがお住いの地域によっては提供できないサービスもございます。各サービスの詳細やご利用方法等については、本・支店までお問合わせください。●税理士・司法書士等の外部専門家および当社提携企業と契約等を提携する場合、報酬等の費用がかかります。

ご投資にあたっての留意点 ●当社の取扱商品等へのご投資には、商品ごとに所定の手数料等をご負担いただく場合があります。●各商品等には価格の変動等による損失を生じるおそれがあります。●各商品等の「契約締結前交付書面」等をよくお読みください。●セミナーではご紹介する商品等の勧誘を行なうことがあります。

大和証券
Daiwa Securities

商 号 等：大和証券株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第108号
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人日本投資顧問業協会、
一般社団法人金融先物取引業協会、
一般社団法人第二種金融商品取引業協会、一般社団法人日本STO協会

大和証券コンタクトセンター

0120-010101

【平 日】8:00 ～ 18:00（土・日・祝日・年末年始を除く）

●大和証券に口座をお持ちのお客さまは、お取扱店番号（3桁）・口座番号（6桁）・暗証番号をあらかじめご準備ください。

大和証券ホームページ

www.daiwa.jp

日本三鳥居鼎談～平和を繕うより輪を創ろう～

全国大会　実行委員長　加藤 公啓

令和7年5月20日、大阪市のシェラトン都ホテル大阪にて、全日本仏教青年会の全国大会が開催された。今回の大会は、生成AIの台頭や情報過多社会の中で変容しつつある「拠り所」の在り方を見つめ直し、宗教がその中で果たしうる役割について多角的に考察することを趣旨としたものである。

人は考え、悩む存在である。だからこそ、古来より信仰という「拠り所」を求めてきた。だが、AIやSNSの発達により膨大な情報が常に流れ込み、瞬時に解答が得られる現代において、人間は「考えること」そのものを手放しつつあるように見える。宗教という営みは、単に個人の精神的安寧を支えるものにとどまらず、他者との共有・共鳴を通じて、言語化され、継承されてきた。では、その宗教が今、この急速な社会変動の中で、どのようにして人と人、そして社会と関わっていくのか。そんな問題意識が、本大会全体を貫く通奏低音となっていた。

国内外における宗教的イデオロギーによる衝突や、宗教団体と政治権力との不透明な関係性が社会的な疑念を呼ぶ中、私たち仏教者は、時代の風に押し流されるのではなく、あえて立ち止まり、宗教の本質とは何かを問い直す必要に迫られている。本大会では「いのちとこころとしあわせと」と題し、宗教の境界を越えた対話と探求の場を設けることを目的とした。登壇者には、神道・仏教・修験道の重鎮に加え、AIロボット研究の第一人者、哲学者といった多分野の識者を迎えた公開鼎談形式のシンポジウムを企画し、宗教の現代的意義を新たな視座から捉え直す試みとなった。

大会は午後二時、『戦後80年慰霊法要及び未来への祈願法要』と題し、慰霊と未来への祈りを込めた厳粛な法要から幕を開けた。会場内には、加盟各団体の青年僧侶らが一堂に会

し、読経の声がホール全体に響き渡る中、参加者は深い合掌とともに、過去への追悼と未来への誓いをひとつに重ね合わせた。

戦後から今日まで、日本仏教は平和の維持と地域社会への貢献をその使命として歩んできた。しかし近年では、宗教に対する関心の希薄化、世俗化の波の中で、その存在意義そのものが問い直される場面も増えている。そうした今だからこそ、改めて命の重みと、その命を支える心の静寂に耳を傾けることが求められているのではないか――法要に込められたのは、そうした静かな、しかし力強いメッセージであった。

法要に続いて、当会新井順證理事長より、ご来賓・参加者への感謝と大会趣旨に関する想いが語られた。

「戦後80年」という節目にあたり、理事長は、大阪大空襲・東京大空襲・沖縄戦・広島・長崎への原爆投下など、幾多の悲惨な出来事に触れつつ、法要のなかで包括的に慰霊と祈りを捧げた背景を説明された。

個人的な体験として、理事長は自身の祖母より「あなたは戦死した親族の生まれ変わりかもしれない」と語られて育ったことを紹介し、当初は思春期らしい反発もあったが、同じように“きな粉餅”を好むという何気ない共通点に祖母が涙ぐむ姿を見て、いつしかその言葉に重みと慈しみを感じるようになったという。「命を失った人々の思いを、誰かが受け継いでいるのだとすれば、それはとてもありがたいこと」と語り、命の連なりの尊さと、戦争の記憶を語り継ぐことの意義を力強く訴えた。

また、本大会の主軸となる「日本三鳥居鼎談」についても触れ、「神道・仏教・修験道という異なる宗教的背景を持つ三つの鳥居を結び、“心と命としあわせ”を語り合う時間にしたい」と趣旨を紹介。「それぞれの立場から発される言葉が、参加者にとって心に残る“持ち帰り”となるはず」と述べ、会場に集った多くの聴衆へ「楽しんでご参加いただきたい」とあたたかく呼びかけられた。

理事長の言葉からは、過去を忘れず未来へとつなぐ姿勢、そして宗教の枠を越えて手を取り合うことの大切さが、静かに、しかし力強く伝わってきた。

法要に続き午後二時半より開催された本大会の中心企画が、シンポジウム「日本三鳥居鼎談～平和を繕うより輪を創ろう～」である。本鼎談では、日本宗教界の象徴的な存在ともいえる「三鳥居」の名のもとに、嚴島神社権禰宜・藤井幹也氏、金峯山寺管領・五條良知猊下、四天王寺管長・瀧藤尊淳猊下という神仏両界の重鎮が一堂に会し、加えて大阪大学栄誉教授・石黒浩氏、進行を京都大学教授・出口康夫氏が務めるという異例ともいえる顔ぶれが実現した。

宗教と科学、伝統とテクノロジー、一見すると相反するような領域を跨ぐこの鼎談は、まさに「共に考える」という姿勢そのものを体現していた。

冒頭では、厳島神社、金峯山寺、四天王寺の歴史についてそれぞれ説明いただき、石黒教授には自身の研究と仏教、宗教との関わりについて言及いただいた。

そして出口教授の緩やかな導入により始まった鼎談では、事前に出口教授から各登壇者に送られた質問への回答というかたちで切り出された。

質問内容は下記の通りである。

① AI/ロボットも宗教的体験を持ったり、宗教的境地を得たりすることができるのか？できるとすると、なぜ、どのようにできるのか？できないとするなら、AI/ロボットには何が足りないのか？

② AI/ロボットは他者を宗教的に救うことはできるのか？

③宗教活動でAI/ロボットを活用する機会はありうるか？ありうるとすれば、それはどのようなものか？

但し、それぞれの回答は各宗教・各社寺を代表するものとしてではなく、あくまで個人の見解であることを留意されたい。

藤井氏は、宗教とAI・ロボットというテーマに初めて向き合ったと率直に述べつつ、宗教的体験がAIに可能かという問いに対しては、体験そのものをデータとして蓄積・活用することは可能かもしれないが、やはり人間の体験とは本質的に異なるものではないかと指摘した。

また、「宗教的境地」とは何かを考える中で、心の安らぎ、精神的成長、社会とのつながりの三点が柱であるとし、それらを目的とする宗教的境地は、AIやロボットにとっては必要とされないものかもしれないと示唆した。

加えて、日本文化に深く根差す「非言語的コミュニケーション」や「暗黙知」の重要性に触れ、AIやロボットがこれらをどこまで理解し、適応できるかが問われると述べた。そして神道において人の身体には「魂（みたま）」が宿るとされることを紹介し、AIにこの“魂”が宿るか否かという点に大きな関心を寄せていると締めくくった。

続いて発言した金峯山寺五條猊下は、AI・ロボットと宗教の関係性について、修験道の視点から語られた。修験道とは「実修実験」の道であり、自らの修行を通じて悟りや境地を得るものであるとし、単なる情報処理や動作の模倣では代替できない本質があることを強調された。

たとえば、AIは大峰山の行をこなすことも、読経や印契を完璧に行うことも可能かもしれないが、自らの肉体で汗を流し、生かされている実感や、神仏や他者への感謝を通して得られる宗教的境地は、単なる機能やデータの積み重ねでは到達できないと指摘された。

また、AIが仏教教学を網羅し、場面に応じた説法を行うことも技術的には可能だが、それを「信じられるかどうか」は受け手の心に委ねられており、本質的な救済には「人と人との関係性」が欠かせないと述べた。

さらに、AIの進化は不可逆である以上、それとどう共存し、仏教者としての本質をどう保ち続けるかが問われていると語り、「生身の人間だからこそ持てる感覚や重みを忘れてはならない」と力強く締めくくられた。

四天王寺瀧藤猊下は、人工物と自然との関係に注目しつつ、「山川草木悉有仏性」の観点から宗教的生命観を述べた。自らの回峰行の体験を通し、当初は「山に木や岩がある」と感じていたが、次第に「木や岩、草原が山をなしている」との感覚に変わり、自然との一体感や生命力の宿りを実感したという。

100日間の修行では、天候の変化や自然の厳しさを全身で受け止めることで、自然がただの外界ではなく、生きて作用する存在であると感じるようになったと語る。このような体験から、人間が「人工物」と「自然物」を明確に区別しよう

とすること自体に、先入観があるのではないかと問題提起した。

AIやロボットに対しても、単なる人工物と捉えるのではなく、存在に生命性を見出す感性の可能性が問われるとしながらも、仏教が2500年の歴史を持つにもかかわらず、人間の心は進歩していない面もあると指摘。最終的には「悪をなさず、善を行い、自らの心を清める」という基本に立ち返り、AIによってむしろ人間の心が正される契機になればと希望を語った。

石黒教授は「AIは宗教を持てるか？」という問いに対し、宗教とは「死とは何か」「なぜ生きているのか」など、人間の根源的な問いに対する指針であり、AIがそれを本質的に持つのは困難だとしつつも、表層的に宗教的言説を語るAIを設計することは可能であると述べた。

行動を通じて意識や信念が形成される人間の在り方に倣えば、AIも「唱えることで信じる」ような構造を持ち得る可能性があり、将来的には宗教的感覚を持つように見えるAIが現れるかもしれないと語った。

また、人を救済するという点においては、AIが膨大な知識と適切な対応力をもって支援することは可能であり、一定の効果が期待できるとしながらも、本質的な共感や心からの救済は依然として難題であると述べた。

さらに、AIを使うべきでない場面は存在しないとし、人間は常に技術とともに進化してきた存在であることを強調。最後に、人類の未来がAIとの共生によってどう変容していくのか、哲学的・存在論的な問いに関心を示しつつ、未来への技術的責任について考える必要性を説いた。

会場では終始、笑顔と深い沈黙とが交互に訪れ、壇上の言葉の一つひとつに耳を傾ける参加者たちの姿が印象的であった。AI時代という、これまでにない大転換の時代において、人間の拠り所としての宗教のあり方が、科学の知見を交えて丁寧に掘り下げられたこの鼎談は大きな余韻を残すものとなった。

午後四時半、シンポジウムは盛況のうちに幕を下ろした。最後に全体を振り返り、本大会の意義について改めて確認したい。

第一に、本大会が現代社会における「宗教のリアリティ」に真っ向から向き合い、情報社会に生きる青年仏教徒たちに新たな視座をもたらしたことは、何より大きな成果であった。AI・SNSといった時代の象徴ともいえるテクノロジーの光と影を正面から受け止め、そこに「人間らしさ」を照らし返す——それはまさに、仏教の「無常観」や「縁起観」が21世紀にもなお有効であることを示した瞬間でもあった。

第二に、神道・仏教・修験道・科学といった異なる価値観が、対立や排除ではなく「共に考える場」を築き得たということ。それは、全日本仏教青年会が一貫して掲げてきた「対話の精神」の実現であり、全国の若き宗教者たちが新たな一歩を踏み出すための大きな糧となったに違いない。

そして第三に、本大会が単なる知的イベントに終わらず、法要に始まり、心と命を見つめる祈りの時間を共有することで、「宗教とは何か」を頭ではなく身体で体験できる構成となっていたことは極めて意義深い。「共感」「沈黙」「祈り」——そうした人間固有の営みこそが、これからの宗教の礎であることを、あらためて実感させられたのである。

全国各地から集った参加者たちは、それぞれの現場に戻り、この大会で得た問いと示唆を携えて、日々の修行・実践へと向かうだろう。宗教は「完成された答え」ではなく、「問い続ける勇気」を育む場であることを、私たちは忘れてはならないと感じた。

このたびの全国大会にご協力、ご参加いただいたすべての皆様に、深甚なる感謝を申し上げます。共に祈り、共に語りあえた一日が、これからの仏教の未来を切り拓く一歩となることを心より願っております。

イラスト　理事長　新井順證

救援委員会活動報告

救援委員長　西島 泰伸

今期の救援委員会としましては、令和６年１月１日に発災した能登半島地震の災害復興をメインテーマとして活動をしてきました。活動内容として、東大寺千僧法要前に東大寺南大門前にての募金活動、また現地でのボランティア活動等を行いました。

今年は「青年僧なら多様な活動が出来るだろう」と各方面からの浄財が集まり復興支援の幅が増えたのですが、あまりにも規模が大きくなり、また地理的な問題としてどの様に現地に入りどの様な活動するのか？と云う問題が出て来た為、理事長並びに全日仏青事務局と相談したところ「全日仏青主催でやろう」との事になり『和み落語カフェ』と銘打って復興支援落語会を 11 月 27 日（水）落語家の桂米助（ヨネスケ）師匠と桂空治氏をお招きし石川県輪島市門前公民館にて開催しました。

開催にあたり場所のセッティングを全国曹洞宗青年会（以外、全曹青）様のご尽力により、曹洞宗總持寺祖院様のお膝元である輪島市門前町の公民館をお借りする事が出来、また全曹青並びシャンティ国際ボランティア会（以外、シャンティ）の皆様に各避難所である仮設住宅へ足を運んで貰い開催へのご理解とご参加の呼び掛けを行って頂きポスターとチラシの配布をして頂きました。また、参加する各団体のメンバーには和みカフェにて配布するお茶菓子を「出来るだけ地域色を豊かに」とお願いし、持参して頂きました。

開催に先立ち、前日には臨時理事会を石川県金沢市にある古刹天徳院にて開催し、現地に入る心構え。また現地は僧侶等、聖職者を敬う土地柄ゆえ少しても心の垣根を取り外すため動き易い普段着で現地入りする事等を確認しあいました。その夜は英気を養う為、懇親会にて金沢の駅前で日本海の恵みを堪能し解散したのですが 22 時 45 分頃、福井県沖にて震度５弱の余震が発生。津波や土砂災害の恐れがありましたが、その夜はそれ以上の事は無く翌朝無事に出発する事が出来ました。現地に入るに辺り、レンタカーを１台借りて移動していたのですが前日の余震と目前に迫る惨状に、ただただ声を無くすばかりで「これは復興どころか復旧すらまだではないか」と実感させられました。

正午頃に開催場所である門前公民館に到着しお茶菓子を袋詰めし、お茶のお給仕で出来る様にセッティング。するとしばらくして、それぞれ各避難所から送迎車にて２名、３名と被災された方々が集まりだしましたが、どの方も一様に顔が無表情であり心の傷が様々と見えていたのですが出迎える側の全日仏青事務局、並びに府佛青のメンバーは持ち前の関西色を出し明るく振る舞い「私達は僧侶であっても貴方方は人生の先輩であるので、この場ではなんでも仰って下さい」と声をかけ続け、お茶を配りながら話かけていると少しずつ表情が和らぎはじめ 13 時前には至る所で「お久しぶり！」「そちらの暮らしは？」「○○さんは来てる？」等の声が聞こえ始め、気が付けば 100 名前後の方が集まってました。

13 時となり理事長が挨拶。その後すぐに出囃子がなり石川県出身の桂空治氏が高座に昇り一席始めると、やはり本職の噺家。参加者一同、爆笑の渦が巻き起こり、そして聞き慣れた出囃子が鳴るとメインであるヨネスケ師匠が登場。会場の興奮が更に高まりました。しかし、噺の半ばにて恐れていた余震が発生。地震発生以降、度重なる余震があり、また豪雨災害、そして昨夜の余震。会場に居られる方々の心の傷が再発し、トラウマが出てパニックになるのでは？と危惧しかけた途端ヨネスケ師匠が何事も無い様に、しかし声のボリュームを少しあげ注意を高座から逸らさぬ様にされたお陰で、揺れた事を気付かなかった方も居られる位に事なきを得て拍手喝采の中、ヨネスケ師匠が高座を下りられ無事にイベントを終える事が出来ました。

全ての催しが終わり、お見えになった方々が再び送迎の車

へと戻られる時には少し寂しそうな顔をして、我々に対し名残惜しそうに「今日は有り難うね」「久しぶりに友達に会う事が出来ました」「被災してから笑う事が出来なかったけど今日は久しぶりにお腹の底から笑う事が出来ました」等の嬉しいお言葉を頂く事が出来ました。

皆様が帰られて後、全曹青の方々が手作りの高座を解体されている間、我々は使わせて頂いた公民館を掃除していると、舞台の片隅に脚の取れたグランドピアノが床板に突き刺さって動かなくなっているのを発見。「あぁ、ここではまだ人手や時間が足らないので、この様な物にまでは手が回らないのだろう」と感じ、我々で持ち上げながら脚の応急処置だけをして解散、帰路につきました。

今回、現地に入り感じた事は『半島という特殊な地形による課題』であり、復旧に必要不可欠なライフラインの国道が途切れた時に、如何に現地へと向かうのか？です。物資を運ぶ為の道路が寸断され、少しずつ修繕舗装しては奥に向かうという方法しか無く、それにより半島の手前と奥では物資の量やボランティアの数も違うという現象が起きていました。故に被災地に残られている方々は精神的ストレスにより持病の悪化、最悪の場合には自死の可能性すらある。という問題が浮き彫りとなっています。我々、青年僧侶に出来る事には限りがありますが、これからも現地に入りせめて傾聴活動だけは行って行きたいと考えされられました。

最後に今回の活動に際して多大なるご尽力を賜った全曹青、シャンティの皆様、そして落語芸術協会の皆様に厚く御礼申し上げます。

復興支援
和み落語カフェ
桂米助

復興支援
和み落語カフェ

東日本大震災　慰霊法要

全曹青第25期　副会長兼災害復興支援部コーディネーター　全日仏青理事　山崎 秀典

東日本大震災発災より14年を数える令和7年3月11日、その逮夜でもある10日、全日本仏教青年会（以下、全日仏青）と全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）、WFBY世界仏教徒青年連盟の共催で、福島県伊達市・成林寺に建立された納経塔前において、「東日本大震災慰霊法要・復興祈願法要」を執り行いました。YouTubeやZoomのオンラインツールも用いて宗派を超えて、多くの方々のご参列を賜りました。昨年度に引き続き、令和6年能登半島地震はじめ、全国における自然災害被害への慰霊と復興にむけての願いを捧げさせていただきました。私自身、法要を終えてたくさんの感じるものがありました。

一つに、被災された皆さまの悲しみや苦しみは決して変わらないこと。ともに手を合わせ、御香を献じる姿から、また法要の翌日、福島県の朝刊の記事から「このことを忘れてはならない」と強く感じました。記事には、被災して亡くなった当時六歳の園児、その同級生が成人をむかえ、亡くなった園児が成人した晴れ姿を描いた肖像画とともに記念撮影をするもの、持ち主不明の遺留品が47万点以上にのぼり保管方法の課題が出ていること、除染土の受け入れ先の問題など、根深く解決しえないものが多くありました。未だに震災は終わっていないことを目の当たりにいたしました。

二つに、先人たちの活動の足跡、その大きさであります。東日本大震災をはじめ、私たちはこれまで多くの災害に見舞われてきました。それからまた立ち上がる時、礎となったのは「連携」であったと思います。個人ではいかんともしがたい状況でも、ともに寄り添い、力を合わせることでより、私たちは歩みをより強いものとしてきたのだと信じています。全日仏青では能登半島地震発災直後より、各団体のバックアップをしながら、正副理事長会議、理事会等において情報共有や、活動報告などを行って参りました。そのつながりを活かして、令和6年11月には「和み落語カフェ」を輪島市門前町で開催し、100名を超える方の参加をいただきました。皆さまが笑顔になり、笑い声に溢れる時間をお届けできたと思います。そういった活動を経た本年度の本法要はとても想いが深まるものであり、平時からのこういった連携の大切さを痛感するものでありました。

三つに、祈りの大切さです。私がこの法要に参加したのは、コロナ禍中、令和3年でありました。前年はコロナ禍のため中止となりました。昨年度からは2年間現地で参加する機縁をいただきました。当初「ただ」祈っていたところから、多くの方とともに祈ることを経て、変わることのない悲しみや苦しみ、それでも未来を信じて歩み続ける足跡を目の当たりにしました。その根幹には「祈り」があったのだと感じます。私の中でもただ祈り続けること、想いを乗せて多くの力を合わせて祈ることを体験し、両者の大切さを痛感いたしました。

『東日本大震災鎮魂の誓い』
共に悼みます 失われた命を
共に祈ります　別れた命の安らぎを
共に忘れません　その輝いていた命を
共に縁(よ)り添います　同じ命を生きる証に

納経塔脇の碑にあるこの青年僧侶の誓いを体現できる「個」と「連携」の在り方を、これからも大切に考え続けたいと思います。

教化研修委員会活動報告

教化研修委員長　小澤 慧月

今年度の教化研修委員会は阪神・淡路大震災より30年、第二次世界大戦終戦より80年の節目の年となり、新井順證理事長のもと、世界の絆を和する祈りを心に「和が儘に集い和が為に祈る」をテーマとした「仏法興隆花まつり千僧法要」の開催に向けて活動して参りました。

昨今のインバウンドの影響もあり、会場となる東大寺様では観光客の増加が著しく、土日の開催が困難であるとの事で4月の開催を見送り5月の開催となりました。

その様な状況にも拘わらず、東大寺様・南都二六会様には協議の中で前向きなご提案や寛大なご配慮を頂き、思い描く法要を実行する事が出来ました。

また打ち合わせの中に於て、第一回千僧法要の折に埋められたタイムカプセルの存在も話題となり、2038年に開封される事が確認され、今後その為の協議も行っていく事を確認しました。

当日は新緑と5月末とは思えない涼風の中、法螺の法音に先導された300名を超える行列が金鐘ホールを出発。中門からは東大寺式衆と歌の奉納をされる東大寺学園幼稚園の園児も合流して大仏殿へ入堂すると、60名を超す一般参拝の皆様と居合わせた大勢の観光客が迎えられました。

園児による「世界がひとつになるまで」の歌唱奉納に続いて法要となり、新井理事長による聖徳太子様の和の心に依る法則が読み上げられた後、般若心経・世尊偈の読経の中で故・和泉徹氏写経の大般若600巻の転読作法。

大仏様を讃える南無盧舎那仏のご宝号の後に、本年新たな試みとなる各加盟団体による様々なご宝号・お念仏・お題目がお唱えされ正に大仏様のもとに和を以って集う法要が厳修されました。

その後、アショカピラー宝前に於いて嶋司芳正 南都二六会会長お導師による法要が執り行われ、代表者の灌仏と参列者一同による焼香が行われました。

先輩諸氏が繋いでこられたこの法要を途絶える事無く、時代に即した形で継続できる様、過去からの貴重な資料と今回の経験をしっかり引き継いでゆく事の大切さを改めて実感させて頂きました。

開催に際し、様々ご配慮を頂きました東大寺様、共催頂いております南都二六会様、ご協力を頂いております奈良県曹洞宗青年会、加盟団体、関係団体の皆様、諸事奔走頂きました事務局の皆様にこの場をお借りして篤く御礼申し上げます。

諸宗教対話委員会活動報告

今こそ宗教対話を

諸宗教対話委員会　委員長　杉谷 義恭

平成25年、伊藤政浩第19代理事長のもと、「諸宗教対話委員会」が発足しました。この委員会は「諸宗教対話フォーラム」や「Inter Faith －諸宗教対話駅伝」などを開催し、異なる宗教同士の交流を進めてきました。近年では「神道青年会全国協議会」との関わりも深まり、お互いの理解を深めています。

「宗教対話」という言葉が日本で広く知られるようになったのは、1986年10月にローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世が呼びかけた集まりがきっかけです。世界中の宗教指導者たちがイタリア・アッシジに集まり、それぞれの宗教儀式を通じて世界平和を祈りました。翌年には日本でも「比叡山宗教サミット－世界宗教者平和の祈りの集い－」が開かれ、国内でも宗教対話の大切さが強く意識されるようになりました。

現在、世界各地で宗教や民族、国家の違いから争いが絶えず、多くの人が命を落とし、住む場所を追われています。ウクライナや中東、アフリカなど、各地の紛争はニュースでも頻繁に目にしますが、こうした悲劇の背景には、互いを知らないことや誤解、偏見が深く関わっています。だからこそ、異なる宗教や文化を持つ人々が話し合う「宗教対話」は、今ほど重要な時代はありません。

宗教対話を行うには、特に三つの姿勢が大切です。第一に「対等」でいること。相手を見下したり、自分の考えを押し付けたりせず、同じ立場で向き合うことです。第二に、相手の信仰や考え方への「敬意」を持つこと。そして第三に、相手の宗教や文化を「知らないままにしない」ことです。違いを意識するばかりではなく、共通点を探す努力も欠かせません。

立場や考えが異なる相手とも、対話の窓を閉ざさず、話し合いを続けることが平和への一歩です。地域社会にも小さな宗教対話の場はあり、日本から世界へ平和の思いをつなぐため、これからも宗教対話を続けていきたいと思います。

国際委員会活動報告

国際委員長　田ノ口 太悟

令和6年度の国際委員会活動報告をさせていただきます。まず世界仏教徒青年連盟の関連行事についてです。ここ数年毎年行われておりましたIBYEに関しては、令和6年度は開催がありませんでした。世界仏教徒青年連盟行事については東日本大震災復興慰霊祈願法要を共催させていただいていますが、それは他の記事中で紹介している通りであります。

本年度の国際委員会は次の活動目標を掲げ推進いたしました。

①世界仏教徒青年連盟　日本センター常設委員会との協働及び事業運営と事務の担当

②加盟団体の海外向け活動や動画等の発信やWFBYへ紹介。全日仏青ホームページの英語ver、フライヤー作成等（中長期的に）

③CLUB25 JAPANとの連携活動　各大学仏教青年会の現状把握

④研修会事業の開催（対面あるいはオンライン）

これらの活動目標を掲げ、一年間活動を展開いたしました。12月には、国際委員会としては久しぶりに対面での委員会開催を行うことができました。東京都浜松町の東京グランドホテルにおいて12月11日に開催し、引き続き全国曹洞宗青年会の行事である「世界の寺院から～ブラジル編～」を委員会参加者全員でオンライン視聴いたしました。この行事はブラジルのお寺の曹洞宗僧侶にオンラインでインタビューと寺院紹介を行うという企画で、全日仏青加盟青年会の国際活動を知る良い機会となりました。

また、CLUB25 JAPANとの連携活動を活性化するにあたって、基盤となる各大学仏教青年会の皆様に参加意識を持ってもらうため、全日仏青の紹介パンフレットを作成する等のアイディアが出されました。こちらについても委員会内で担当を決め、継続して作成を行なっております。

研修会事業についても内容や講師の選定を進めましたが、研修会日程候補が繁忙期である5月しか調整できず、見送ることにいたしました。

国際活動はまさに全日仏青らしい、規模の大きな活動です。来期以降も国際委員会活動が積極的に展開されることを願っております。

世界仏教徒青年連盟（WFBY）活動報告

全日本仏教青年会理事 WFBY 常設委員会委員 WFBY 事務局次長　**髙柳 龍哉**

WFBY 世界仏教徒青年連盟とは、未来を担う青年たちの仏教に対する理解を広め、深める事を目的に結成された国際ネットワークです。1972 年、世界仏教徒連盟 WFB の青年部として正式に発足しました。現在、15 ヶ国、35 の国を代表する仏教団体が加盟する世界最大の国際仏教青年会に成長しています。

本会、全日本仏教青年会は 1977 年に設立されました。その大きな理由は、翌年 1978 年、26 年ぶりに開催が決まった「世界仏教徒会議日本大会（WFB・WFBY 総会）」にあります。実は、WFBY が設立された当時、日本には超宗派の国を代表する仏教青年会がなく、WFBY に加盟できずにいました。この日本大会を契機に日本が WFBY に加盟することを大きな目的として、今の全日本仏教青年会が設立されたというわけなのです。

WFBY はタイ・バンコクにある WFB 本部センタービル内に本部を置き、オンラインを駆使した執行役員会議（EXBO）を頻繁に開きながら、対面での国際交流プログラムを組織しています。基幹事業となる国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」や国際仏教徒青年フォーラム「IBYF」などです。各国の青年仏教徒の交流を促し、世界平和への貢献と仏教の宣揚を目的に活動しています。

全日本仏教青年会は、「WFBY 日本センター」として、上記、執行役員会議（EXBO）をはじめとする様々な国際会議や、WFBY が主催・協力する多岐にわたる国際交流・社会貢献事業に率先して参加しています。

今年度（令和６年７月～令和７年６月）はまず、7 月 6 日（土）から 7 日（日）にかけて、サイパンで太平洋戦争戦没者慰霊法要をつとめました。北マリアナ諸島知事・サイパン市長はじめ現地の方々とともに、北マリアナ諸島で歴史上最も多くの方々が亡くなられた日とされる 1944 年 7 月 7 日「バンザイ突撃」の日から 80 年の節目に際し祈りを捧げるとともに、現地の視察を行いました。戦争の記憶を風化させず、平和への誓いを新たにするための重要な場所として、WFBY はサイパン島での慰霊法要を共催し、歴史と向き合う真摯な姿勢を示しました。8 月のモンゴル国際仏教文化交流プログラムでは、モンゴルの独特な仏教文化を学び、インドネシアと多文化・多宗教国家であるインドネシアでの仏教のあり方を学び、交流を深めました。10 月にはパリのユネスコ本部ビルのメイン会議場にて国際平和会議に参加し、村山 WFBY 会長がプログラムの最初の挨拶をつとめました。

翌年 4 月には、ネパール大地震から 10 年の節目として竣工した仏教救援センタービルの落慶式に来賓として参加しました。WFBY と本会は、当時ネパールに対し活発な支援を行っており、その後も継続的に震災孤児の教育支援に関わってきました。ネパール仏教青年会からは本会への深い感謝の気持ちを伝えられました。5 月にはベトナムにて国連ウェーサーカ祭、6 月にはマレーシア仏教青年会、インドネシア仏教青年会の全国大会に参加しました。国連ウェーサーカ祭は言うまでもありませんが、マレーシア、インドネシアの全国大会でも、青年仏教徒が 500 人以上集まっての会議やコンペティションが開催され、海外仏教徒の精力的な活動とその熱意に対して、驚きを禁じ得ませんでした。

WFBY 日本センターとして WFBY 事業への参加は、国境や

を尊重し慈悲の心を持つ仏教の「和」の精神を国際社会に具現化するものです。

WFBY の活動は、未来を担う青年仏教徒たちが、世界平和と人々の幸福のために、たゆまぬ努力を続けている証しであり、その継続的な取り組みに今後も大きな期待が寄せられます。理事長を WFBY 日本センター長として仰ぐ本会は、今後も WFBY の核となる地域センターとして重要な役割を担ってまいります。皆様のご理解とご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

宗派を超えて世界の青年仏教徒の緊密な連携を構築します。さらにその連携が、国際社会の課題解決に積極的に取り組むきっかけとなります。オンライン会議の活用による効率的な運営、国際交流プログラムを通じた相互理解の深化、そして災害支援や慰霊法要といった具体的な社会貢献活動は、他者

【今年度の活動報告】

〈令和 6 年〉

・太平洋戦争戦没者慰霊法要、並びに現地視察
　開催日：7 月 6 日（土）～7 日（日）
　会　場：アメリカ合衆国、サイパン島
　共　催：世界仏教徒青年連盟（WFBY）

・モンゴル国際仏教文化交流プログラム
　開催日：7 月 14 日（日）～ 19 日（金）
　会　場：モンゴル、ウランバートル
　主　催：WFBY モンゴルセンター／世界仏教徒青年連盟（WFBY）

・インドネシア国際仏教文化交流プログラム
　開催日：8 月 11 日（日）～ 8 月 15 日（木）
　会　場：インドネシア、中部ジャワ州マゲラン県
　主　催：インドネシア共和国宗教省仏教公共指導総局／インドネシア上座部仏教／青年会（PATRIA）／世界仏教徒青年連盟（WFBY）

・WFBY 執行役員会議（EXBO）
　開催日：8 月 13 日（火）
　会　場:インドネシア、ジョグジャカルタ（ハイブリッド）

・WFBY 執行役員会議（EXBO）
　開催日：9 月 12 日（木）
　会　場：オンライン

・ラーマ 10 世国王生誕 6 周年記念　国際平和会議
　開催日：10 月 27 日（日）～ 29 日（火）
　会　場：フランス、パリ　UNESCO 本部ビル
　主　催：タイ王国大使館、タイ王国ユネスコ常設代表部、世界仏教徒連盟（WFB）
　共　催：世界仏教徒青年連盟（WFBY）、世界仏教徒大学（WBU）、WFB 地域センターおよび関連団体

・WFBY 執行役員会議（EXBO）
　開催日：11 月 7 日（木）
　会　場：オンライン

〈令和 7 年〉

・WFBY 執行役員会議（EXBO）
　開催日：1 月 27 日（月）
　会　場：オンライン

・東日本大震災慰霊復興祈願法要
　開催日：3 月 10 日（月）
　会　場：福島県、曹洞宗成林寺
　共　催：全日本仏教青年会・世界仏教徒青年連盟（WFBY）・全国曹洞宗青年会

・YMBA 仏教救援センタービル “Metta Building” 落慶式
　開催日：4 月 4 日（金）～ 6 日（日）
　会　場：ネパール、カトマンズ
　主　催：YMBA（ネパール仏教青年会）

・国連ウェーサーカ祭
　開催日：5 月 4 日（日）～ 6 日（火）
　会　場：ベトナム 、ホーチミン
　主　催：国連ウェーサーカ祭国際組織委員会（ICDV）、ベトナム仏教僧伽

・ミャンマー地震支援募金
　開始日：6 月 3 日（水）
　内　容：本年 3 月 28 日に発災したミャンマー地震支援のため救援委員会、国際委員会と協働して義援金募金開始。WFBY 日本センターとして 20 万円の義援金を WFB へ届けた。

・マレーシア仏教青年会（YBAM）創立 55 周年記念　全国代表大会
　開催日：6 月 6 日（金）～ 7 日（土）
　会　場：マレーシア、クアラルンプール
　主　催：マレーシア仏教青年会（YBAM）

・WFBY 執行役員会議（EXBO）
　開催日：6 月 7 日（土）
　会　場:マレーシア、クアラルンプール（ハイブリッド）

・Porseni Nasional VI PATRIA 2025（インドネシア仏教青年会第 6 回全国大会）
　開催日：6 月 27 日（金）～ 29 日（日）
　会　場：インドネシア、ジョグジャカルタ
　主　催：PATRIA（インドネシア仏教青年会）

令和６年度　加盟団体活動報告

❖令和６年度金峯山青年僧の会活動報告

金峯山青年僧の会　会長　小澤 慧月

令和６年度事業として、７月23日に葛城28宿友ヶ島への自我偈写経の埋経を行いました。是は五條良知管長猊下の３年に亘る八千枚護摩供結願座へのとも祈りとして「みんな良うなれ！」の願いを込めて浄書された四百巻余りの写経で、開闢座での大峯への写経に続き、結願から新たに始まるとも祈りを願って、もう一つの修験の聖地である葛城28宿の峯。そのスタートの地である友ヶ島への埋経を計画したものでした。しかし台風による被害やコロナ禍で中断を余儀なくされていました。

この度、多くの方のご協力を得て実現が叶い、五條良知管長猊下にもご随喜頂く中で、閼伽井、序本窟、観念窟等の行場を伏し拝み、ご開祖役之行者様の御宝前で法華懺法・採灯護摩の法要をお勤めし、傍らに埋経の宝塔を建立させていただく事が出来ました。

また、青少年育成事業として毎年行っている三日坊主体験を８月２日～４日に開催し、勤行や止観、掃除などの修行体験と共に蓮紙を使った「蓮灯り」を製作したり、奥吉野の清流での川遊びをなど多くの「体験を通した学習」を行って頂きました。

最終日には自分たちで作った蓮灯りを御宝前にお供えしての護摩供で自分の将来の夢や願いを込めた護摩木を自らで投入して３日間の修行を終えました。

その他、観桜期の諸災害復興の托鉢や法華経不断経修行を開催しました。

❖第28期全国浄土宗青年会　令和６年度活動報告

全国浄土宗青年会　理事長　杉山 裕俊

第28期全国浄土宗青年会では、【勧信求往―ともに信じ 共に歩む―】という活動テーマのもと、自行化他の基盤となる己の信を力強く育み、青年会の魅力である同世代とのつながりの中で互いの信を勧め合う、そのような機縁づくりを目指してさまざまな事業に取り組んでまいりました。

第一に、主たる研修活動事業として第20回全国大会（327名）を東北・山形の地で、第50回総合研修会（157名）を大本山増上寺にて開催させていただき、宗内外から精選された講師を招聘するだけでなく、対談やコーディネーターを交えたディスカッション、さらには会場内スペースを利用したブース展示等も積極的に設けることで、いずれも浄土宗開宗850年の慶賀に相応しい研鑽の場となりました。

第二に、念佛継称事業として２度の別時念佛会（計126名）と第15回同時同行念佛会（1,034件）を実施いたしましたが、とりわけ、今期の別時念佛会は全国津々浦々、会員の自坊にて一座の法要を勤めさせていただきたく、事前公募によって会所の選定を行いました。

これらの事業を通してまさに勧信と求往、すなわち互いの信仰・信念・信心を勧め合った同信の仲間たちと、今度は共々に往生を求めながらお念佛の同行に励み、そこから再び信を深めてゆくという、青年会らしい闊達な信⇄行の好循環を生み出すことができるよう、来年度も引き続き法然上人への報恩感謝、並びに先輩諸大徳への敬意をもって令和の大勧信事業を推進してまいります。

❖令和６年度 全真言宗青年連盟 活動紹介

全真言宗青年連盟　理事長　門屋 昭譽

令和６年度における全真言宗青年連盟の活動を紹介いたします。

まずは、令和６年10月８日に真言宗醍醐派総本山醍醐寺で開催された「第44回結集醍醐大会です。「法燈～祈りを繋ぐ今～」をテーマに掲げ、記念法会や講演が盛大に行われました。この結集大会は毎年開催しており、次年度は智山青年連合会が担当となり、令和７年９月に第45回大会が開催されます。

また、令和６年11月11日には、災害時における迅速な支援体制を強化するため、災害対策講習会として、重機講習会が開催されました。これは、一般社団法人 日本笑顔プロジェクトにご協力いただき、被災地での救援活動に貢献するため、青年僧侶自らが小型重機の免許を取得する講習会でした。防災意識の向上と実動的な支援能力の強化に繋がる重要な取り組みとなりました。

次年度に向けては、令和７年11月30日開催予定の「十八本山お砂ふみ」（於：大本山須磨寺）の準備を鋭意進めております。

❖神奈川県佛教青年会 活動報告

神奈川県佛教青年会　会長　和田 弘雅

当会は現在、正会員約30名、また多くの賛助会員に支えられ活動しています。

年２回の機関誌『神奈川県仏青』、年１回の布教誌『おぼん』の発行、災害救援、研修会の開催などを主な活動として行っています。

令和６年度は11月と４月の２回研修会を開催いたしました。11月の研修会では（一社）お寺の未来・井出悦郎氏をお招きし「これからのお寺のあり方を考える―《供養》を切り口として―」と題して講演をいただきました。４月の研修は移動研修として埼玉に赴き、上尾市を基盤に200年以上続く老舗企業、星野又右エ門商店の星野社長の講演と川越の喜多院を参拝するなどしました。どちらの講演も大変示唆に富むお話しをいただき、これからの寺院を担う青年僧として有意義な時間を過ごすことができました。

また、救援活動としては、５月に行われる川崎市泉福寺さまでの我楽多市への出店、毎年10月に行われる鎌倉の浄土宗大本山光明寺さまの十夜法要に合わせた救援托鉢などを実施いたしました。これらの活動によってお預かりした浄財は神奈川新聞社を通じて被災地へお送りしています。

神奈川県佛教青年会は、本年令和７年に50周年を迎えます。「継往開来」と題して、記念式典・講演会を企画しています。先人・諸先輩の行ってきたことを継承し、発展させながら未来へ伝える。50周年を機に会員一同、足もとと未来を見据える契機とするべく、準備を進めてまいります。

❖全国曹洞宗青年会活動報告

全国曹洞宗青年会　会長　宮本 昌孝

令和６年11月21日、全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）創立50周年記念事業として大本山永平寺報恩拝登が行われました。

全曹青は昭和50年に発会し、第25期で創立50周年を迎えました。第25期スローガン『結集想いを結び合わせ、未来へ』のもと、創立からの歴史と、活動に関わられた先輩方の想いを受け継ぎ、さらに次の代に伝えるために様々な記念事業を展開いたしました。

大本山永平寺と大本山總持寺は語るまでもなく特別な存在です。創立50周年という節目に相集い、一同に両大本山に拝登し、法灯途切れず青年会活動できることへの報恩感謝と、未来に向けての新たなる誓いを行いました。

大本山永平寺に結集した本年は、僧堂内単において坐禅を行いました。これは永平寺様のご厚意によって実現したことで、永平寺安居経験者にとっては懐かしの坐禅となり、また、未経験者にとっては貴重な坐禅となりました。それぞれの僧侶が自らの原点に立ち返った大変貴重な時間となりました。

坐禅後、法堂にて創立50周年報恩諷経、さらには絶えない戦争や自然災害での物故者への供養を行い、世界の安寧を願う世界平和大施食諷経を心を一つに行じました。導師は第25期会長田ノ口太悟師が勤めました。全曹青の加盟曹青会の参加はもとより、全日本仏教青年会とWFBYからもご来賓を賜りました。法堂を埋め尽くすほどのご参加をいただき、まさに今期スローガンの“結集”にふさわしい時間を共有することができました。

大阪府佛教青年会活動報告

大阪府佛教青年会　会長　西島 泰伸

大阪府佛教青年会では令和７年に行われる弊会50周年記念事業の実行委員長の決定、からの準備活動。また令和６年１月１日に発災した能登半島地震の災害復興ボランティアの一助として、３月24日から26日までの期間に石川県七尾市に入り現地の物を購入使用したたこ焼きを焼きながらの傾聴活動、また大阪の様々な場所にて複数回に渡り義援金托鉢をメイン活動に行ってきました。

９月の頭には預かった浄財は20万円を超え、ただ現地に送るだけでは勿体ないと考えていたところ全日仏青として能登半島へボランティアとして入る事が決定したので、併せて現地の市役所へ直接届けようとなり、11月27日に石川県珠洲市市役所、同輪島市門前役場へと各10万円ずつお渡ししてきました。

前日からレンタカーを借りて現地に向かおうとしていたのですが、深夜に福井県沖にて震度５弱の余震がありましたが無事に現地へと到着出来ました。珠洲市に向かう道中は道路が未だ修復出来ておらず仮設の道路もあり、現地市役所の方に話を伺ったところ、被害は地震だけではなく豪雨災害もあったので河川の決壊による被害もあった等、大阪では知り得なかった情報も頂戴する事が出来、その情報を元に12月19日に大阪ミナミにある水掛け不動（浄土宗法善寺）の境内で行った歳末助け合い托鉢で頂戴した浄財を全額、珠洲市市役所へと送らせて頂きました。

融通念佛宗青年会活動報告

融通念佛宗青年会　会長　片井 順香

融通念佛宗では毎年５月１日～５日迄、融通念佛宗総本山大念佛寺にて、菩薩来迎の練り供養、阿弥陀経一万部を読誦し有縁無縁の諸霊を供養する万部法要が行われます。

この法要中、青年会では沢山の方にお寺や仏様に興味を持って頂けるように、青年会活動報告のボードを展示したり、グッズ販売、ぼさつぬりえコーナーを作り、色鉛筆でカラフルに塗って最後に願い事を書いてもらいます。色とりどりのぼさつさまと皆さんの願い事、思い、希望、目標が書かれたぬりえを会場内に貼っていき華やかな雰囲気になります。その後、青年会の僧侶が祈願法要を勤めお焚きあげします。

また、春休み夏休み中に総本山大念佛寺にて行われる安居（僧侶になるための修行）の中で青年会の時間を頂き、青年会とは青年僧が集まり、自坊では経験出来ないようなことを自分達で組み立て実行していく事で色々な経験ができ人生の経験値を上げていく＝僧侶として人間として成長していける団体ですと僭越ながらお話させて頂きました。

今後も融通念佛宗青年会一同、僧侶として一人の人間として、日々感謝の気持ちを忘れず、これからの時代何をすべきかに目を向けて団結して活動してまいりたいと考えております。

埼玉県佛教青年会活動報告

埼玉県佛教青年会　会長　永橋 文教

埼玉県佛教青年会の令和６年度活動報告をいたします。

定例の活動といたしましては、

- 児玉義隆先生ご指導による「梵字勉強会」（年二回）
- 高橋英心先生ご指導による「写仏教室」（毎月一回）
- 埼玉県宗教連盟主催「平和の祈り」（11月川越市　カトリック川越教会）
- さいたま市岩槻区の慈恩寺で行われる、玄奘忌「日想経行（きんひん）」への参加
- 埼玉県佛教会主催行事の手伝い
- 全日本仏教青年会が主催行事への参加

令和６年度は、上記に加え

- 埼玉県佛教青年会創立50周年記念事業実行委員会の発足
- 坂東三十三観音霊場巡り（６月、11月　栃木県　昨年度より継続）
- 歳末助け合い托鉢募金（12月　浦和仏教会共催　於：浦和駅周辺）
- 東日本大震災慰霊法要（３月　宮城県仙台市）
- 加盟団体の復興活動支援

を行いました。

本年（令和７年）10月15日には、埼玉県佛教青年会創立50周年記念大会を開催いたします。当会新会長　元山　憲寿師（令和７年度より・実行委員長兼任）が中心となり、鋭意準備を進めております。

「祖先崇拝再考―日本における先祖供養の歴史を学ぶ―」をメインテーマとし、講師の先生を３名お招きし、

①「仏教伝来前後の祖霊崇拝の歴史」

②「近現代における先祖供養の歴史と実際」

の２講演、さらに講師の先生方によるパネルディスカッションを予定しております。

長年培われてきた先祖供養の歴史を学ぶとともに、これからの僧侶としての活動の一助として頂きますようぜひご参加のご検討のほどお願い申し上げます。

❖阪神淡路大震災、発災 30 年追悼慰霊法要

一般社団法人神戸青年仏教徒会　理事長　矢坂 建人

去る令和７年１月 17 日、阪神淡路大震災、発災より今年で 30 年目を迎えました。本年は神戸に天皇陛下もお見えになられるなど、より厳粛な雰囲気に包まれました。

神戸 JB 事務所にて行う逮夜法要には全日本仏教青年会・新井理事長をはじめ、各加盟団体様、神戸市佛教連合会・善本会長や弊会会員も例年よりも多く見えられた中で法要を行うことができました。

30 年経った今でも多くの方がご参加を頂けることは何よりも有難く、より感慨深いものがあります。そして同時に、震災の恐ろしさを今一度、確認をし、来る南海トラフ地震等に向けて防災の気持ちをより強く持つ１日となりました。

我々、神戸 JB は鎮魂の祈りを何年経っても捧げて参ります。被災を経験した我々だからこそ、出来ることがあると信じています。私自身、被災者の一人としてこの日の体験をいつまでも忘れず伝え、この震災法要を続けることが神戸に生まれた僧侶としての使命だと認識しています。

今年も全日本仏教青年会、地元の方々、その他関係各位にはご参加・ご協力を賜わりましたことに心から感謝を申し上げます。

❖令和６年能登半島地震物故者１周忌慰霊法要ならびに復興祈願法要

天台仏教青年連盟　代表　杉谷 義恭

令和６年 12 月１日、能登半島地震物故者一周忌慰霊法要ならびに復興祈願法要が、金沢市内のホールにおいて厳修された。昨年発生した能登半島地震は、多くの尊い命を奪い、今なお地域の人々に深い爪痕を残している。法要当日は、全国各地から志を同じくする青年僧が多数集まり、物故者への追悼と、被災地の一日も早い復興を願う厳かな法要が営まれた。会場には被災された人たちが訪れ、読経の声が響き渡る中、それぞれが献花や焼香を捧げ、静かに手を合わせた。参列者の表情には、故人への深い哀悼の思いと、被災地を思う温かいまなざしがあふれていた。参列者からは「お坊さんが一同に大勢集った法要は滅多になく、大変有難かった。」とおっしゃっていました。青年僧らは、震災の記憶を風化させることなく、互いに支え合いながら復興を目指す決意を改めて表明し、参列者と心をひとつにした。法要は荘厳でありながらも、未来への希望と絆を感じさせる機会になったのではないだろうか。

❖全国日蓮宗青年会　活動報告

全国日蓮宗青年会　執行部　神谷 行慶

『つなぐのと』

令和７年５月 22 日、第 63 回全国日蓮宗青年僧北陸結集能登大会が、「つなぐのと」という合言葉のもと、能登の地において開催されました。

能登半島地震の物故者慰霊と復興祈念を目的に、全国各地より 250 名の青年僧が能登半島に集いました。

参加者は５つのルートに分かれ、被災した日蓮宗寺院を中心に唱題行脚を行いました。震災から約１年が経過した現在でも、ブルーシートで覆われた建物や、立ち入りが困難な場所が多く残されています。

メディアで取り上げられる機会が少なくなった今だからこそ、「忘れないこと」の大切さを改めて感じる、貴重な結集となりました。

『終戦 80 年 沖縄慰霊行脚・慰霊法要』

令和７年６月 23 日、終戦 80 年という節目の年に、沖縄慰霊行脚が行われました。全国各地より約 200 名が参加し、大規模な慰霊行脚となりました。

戦争経験者が年々少なくなるなか、「戦争を決して忘れてはならない。平和を祈り続けなければならない」という思いの表れであったように思います。

また、琉球山法華経寺（伊東政浩住職）においては、立正平和祈念法要が厳修され、力強い読経とお題目の声とともに、慰霊と恒久平和への祈りが捧げられました。

法要では、全日本仏教青年会の新井順證理事長、WFBY（世界仏教徒青年連盟）の村山博雅会長より、温かいお言葉を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。

『各都道府県慰霊碑塔一斉慰霊法要』

令和７年６月 24 日、沖縄を除く 46 都道府県の慰霊塔・慰霊碑の御前において、全日本仏教青年会加盟団体および琉球山法華経寺様のご協力のもと、一斉に慰霊法要が執り行われました。

本土防衛のため全国各地から集い、命を落とされた方々の御霊に法味を捧げ、私たちは平和を祈り続けることをあらためて誓いました。

加盟団体　協賛広告

一隅を照らそう
TYBA
天台仏教青年連盟
代表　甲斐　健盛
〒709-0413 岡山県和気郡和気町泉609 安養寺内
https://tendai-young-buddhist.com

金峯山青年僧の会
会長　小澤　慧月

和宗　総本山
四天王寺
和宗仏教青年連盟
〒543-0051 大阪府大阪市天王寺区四天王寺1-11-18 総本山四天王寺内
TEL：06-6771-0066　https://www.facebook.com/wyba20121126

Shingon Young Buddhist Federation
全真言宗青年連盟
http://www.kobodaishi.jp
【事務局】
〒719-1123 岡山県総社市上林1046 国分寺内
TEL：0866-92-0037　FAX：0866-31-7706

第28期 全国浄土宗青年会
勧信歩往 ―ともに信じ共に歩む―
理事長　杉山　裕俊
事務局　〒292-0067　千葉県木更津市中央 1-5-6　遵擇寺内
TEL 0438-22-2293
FAX 0438-22-0522
E-mail zjs28th@gmail.com
HP　https://zj.jodo.or.jp
ホームページ QR コード

融通念佛宗青年会
〒547-0045 大阪府大阪市平野区平野上町1-7-26 総本山大念佛寺内
TEL：06-6791-0026　FAX：06-6793-3050　https://facebook.com/yuzusei

全国曹洞宗青年会
第26期会長 宮本昌孝
ともに歩む

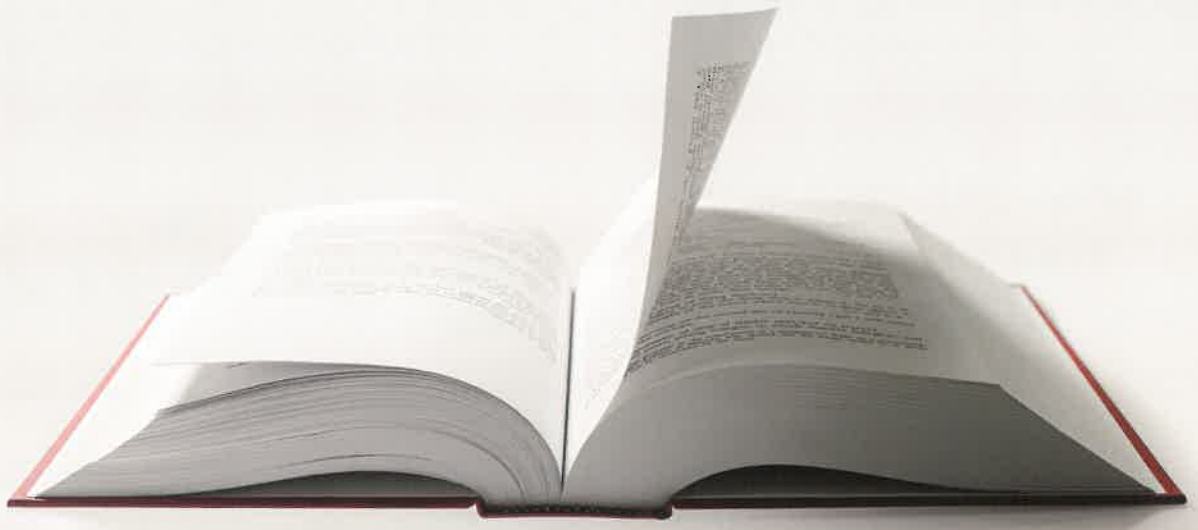
如蓮華不著水
埼玉県佛教青年会
Facebookページ
〒330-0063　埼玉県さいたま市浦和区高砂4-13-18 埼佛会館
TEL：048-861-2138　FAX：048-864-6649

神奈川縣佛教青年會

大阪府佛教青年会
会長　大善寺　西島泰伸
〒543-0073　大阪府大阪市天王寺区生玉寺町5-29
TEL：06-6771-9204　FAX：06-6771-3104

一般社団法人
神戸青年仏教徒会
理事長　矢坂建人
〒650-0017　兵庫県神戸市中央区楠町5-4-16 ワコーレ大倉山フラッツ102号
TEL・FAX：078-382-2245　http://kobe-jb.skr.jp

人生という物語を
1ページずつ、共に



お客様の一人ひとりの“今”と“未来”に寄り添い、
最も信頼されるパートナーを目指していきます。

NOMURA
WEALTH MANAGEMENT

JYBA 第 57 号 2025 年 6 月 30 日発行
発行人／新井 順證
編集／全日本仏教青年会 広報委員会
制作・デザイン／株式会社マツヤマクリエーション

© ALL JAPAN YOUNG BUDDHIST ASSOCIATION 2022

発行所／全日本仏教青年会事務局
〒 543-0051　大阪市天王寺区四天王寺 1-11-18
和宗　総本山四天王寺内
TEL：06-6771-0066

JYBA